

	公表	事業所における自己評価総括表
--	----	----------------

○事業所名	楽らく療養通所 プルーンベリーハウス			
○保護者評価実施期間	2025年2月13日 ～ 2025年2月28日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14	(回答者数)	13
○従業者評価実施期間	2025年2月13日 ～ 2025年2月28日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数)	7
○事業者向け自己評価表作成日	2025年3月31日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個別支援計画の作成と実施体制 【事業者評価】：アセスメントや職員間の連携体制が整っており、ガイドラインに沿った支援計画が策定・実行されている 【保護者評価】：保護者全員が「計画に沿った支援が行われている」と回答 上記より、計画の透明性をさらに高め、支援内容と成果をより可視化していくことで、保護者との信頼関係をさらに深めることが期待されます	●契約時に独自のアセスメントシートを用い、保護者の記入を反映 ●毎日の朝礼で支援内容や職員の役割を確認し、状況に応じて柔軟に対応 ●児童発達支援管理責任者だけでなく、現場スタッフも支援計画の作成に関与 ●ガイドラインに基づいた項目設定と具体的な支援内容の明記	●支援計画の振り返りを「見える化」し、保護者にも共有できる記録形式の検討 ●アセスメントの質を向上させるための標準的な評価ツールの導入 ●支援の進捗や成果を写真やグラフなど視覚的に示す工夫 ●定期面談の回数や機会を増やし、ニーズの変化をより早期に把握
2	職員の専門性とチームワーク 【事業者評価】：職員配置や役割分担、日々の朝礼など、チームでの支援体制が確立されている 【保護者評価】：支援の質や共感的な対応について高評価 上記より、職員間の「支援終了後の振り返り」の充実や、外部研修との連携強化がさらに求められます。	●看護師の加配加算による専門性強化 ●朝礼での支援内容・役割確認、リーダー中心の柔軟な運営 ●月1回の定期研修（人権、ハラスメント、感染対策など） ●モニタリング会議やミーティングで意見交換の場を設けている	●支援後の振り返り（終礼）を習慣化し、チーム内での気づきを共有 ●外部研修や事例検討会への参加促進、スタッフ間での学びの共有化 ●OJTやベア支援による新人職員の育成システムの整備 ●チームビルディングの観点から、定期的な振り返り会や交流機会を設ける
3	保護者との情報共有と信頼関係 【事業者評価】：連絡帳や連絡用紙による日々の共有、苦情対応や安全計画の周知が適切に行われている 【保護者評価】：情報伝達や相談対応への満足度が高く、「とても心強い」との自由記述もあり 上記より、情報共有をベースに、保護者会や家族支援プログラムといった“つながりの場”の再構築が望まれます	●連絡帳や連絡用紙での支援内容・様子の記録とその日中の共有 ●計画立案時のヒアリングにて保護者の声を反映 ●苦情対応フローチャートの整備と迅速な対応体制 ●年4回の広報誌発行による情報提供、感染症・安全対策などの丁寧な説明	●SNSやLINEなどを活用した、よりタイムリーな情報提供の検討 ●保護者の声を集約する仕組み（アンケートや意見ポスト）の導入

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者同士の交流機会・家族支援の不足 【現状】 ●保護者アンケートでは、保護者会やきょうだい交流に関する項目で低評価 ●事業者アンケートでも「父母の会」や家族参加型支援プログラムの開催がコロナ以降停滞と回答 【課題】 ●感染症対策の影響で一時的に中止した交流機会の再開に遅れ ●保護者同士の関係性が希薄になり、相談や共感の機会が不足している	●新型コロナウイルス感染症の影響により、保護者会やイベントを中止・縮小したまま、再開の機会が得られていない ●保護者間のつながりに関するニーズを把握する機会が不足していた ●日々の支援や情報共有は個別対応が中心で、全体的な交流の場づくりが後回しになりがち	●感染対策を講じたうえで、小規模・短時間の座談会や交流イベントを段階的に再開 ●交流イベントをSNSや広報誌で告知し、参加しやすい雰囲気をつくる

2	地域・外部機関との連携の不足 【現状】 ● 自立支援協議会への参加が低く、放課後児童クラブや地域の子どもとの交流機会も少数 ● 保護者側の認識でも「地域の他の子どもと活動する機会」については肯定回答ゼロ 【課題】 ● 地域社会とのつながりが薄く、閉鎖的な印象を与える可能性 ● 外部評価や支援機関との定期的な情報交換・連携体制の強化が必要	● 感染症対応などによる对外活動の制限が長期化し、交流や連携の優先度が相対的に下がった ● 担当者（児童発達支援管理責任者等）の業務負担が大きく、外部会議等への参加が難しいことがある ● 地域資源（放課後児童クラブ、児童発達支援センターなど）とのネットワークが構築しきれていない	● 協議会や地域イベントへの参加担当を明確化し、業務分担でカバーする体制をつくる ● 参加が難しい場合も、オンラインや文書・電話で情報提供・共有を行う工夫 ● 地域の児童館や他事業所と合同イベントや研修を検討し、自然な形で関係性を構築する ● 年度内に少なくとも1回、地域連携の場に参加・協力する行動目標をチームで設定
3	活動プログラムの多様性と振り返りの習慣化 【現状】 ● 活動プログラムの固定化について、事業者では43%が課題ありと感じている ● 支援終了後の振り返り（終礼）が不十分 ● 日々の支援を継続的に見直す体制がやや弱い印象 【課題】 ● プログラムの幅が限定されており、子どものニーズに合った多様な活動展開が不足 ● 振り返りの場を設けることで、チームとしての気づきや改善サイクルの確立が求められる	● 日々の支援や運営に追われ、プログラムの見直しや新しいアイデアの検討が後回し ● 振り返り（終礼）が習慣化されておらず、改善のための「気づき」が体系化されていない ● 担当者任せでプログラムが固定化しやすく、柔軟性やバリエーションに欠けやすい	● 月1回の定例ミーティングで「活動プログラムを振り返る時間」を明確に確保 ● プログラム提案や振り返りを行うシート・フォーマットを用意し、誰でも提案しやすくする ● 職員全員からアイデアを出し合う「活動づくり会議」を実施し、固定化を防ぐ